

「平和大使として学んだこと」

「平和大使」として私にできること

西初石 小学校 5年 氏名 小林珠季



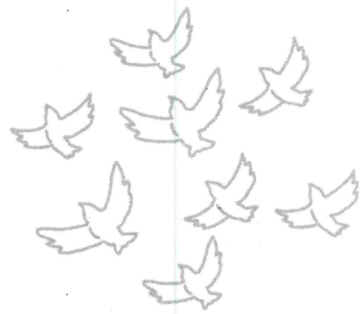
8月5日私は大使の仲間二十八人と一緒に  
広島に到着した。広島市街は山で囲まれ緑が  
多く整備されとてもきれいだった。そしてど  
の角度からも日差しが差し込みとても暑かっ  
た。街に降りると私たちは広島電鉄の路面電  
車で移動した。街並みを眺めながら七十八年  
前にここに原爆が落とされ一瞬にして焼け野  
原となった。夫なんて、私には全く想像ができな  
かった。しかし、その後黒い原爆ドームを見  
て、被爆体験伝承者から話を聞いて思いは  
80度変わった。被爆体験談は驚きとともに  
とても恐しかった。心が痛かった。  
「原子爆弾はとても非情で残酷なものです。  
被爆した人たちはみんな「水…水…」と言っ  
ていました。でも、亡くなっ、てしまいました  
火傷をした人には飲ませるな、飲ませたら死  
んでしまう」とい、ていた。今でも被爆体験  
伝承者の方々の心には原爆の記憶が鮮明に残  
っているのだと感じた。平和記念資料館では  
多くの被爆者の写真を見た。服や、遊ば道具

はとてもボロボロで汚く、壊れていた。鉄の  
物や石でできた物も大きく曲がって、壊れ、  
崩れていた。中でも一番心に残っているのは  
被爆者の体や顔の火傷と傷だ。原爆によって  
火傷で背中が腫れたり、目が開かなくなり視  
力がなくなったり、皮膚が垂れ下がったりし  
ていた。火傷や傷を負っていない人でも、何  
か月か経つと顔に濃い紫色の点々が現れ、髪  
が抜け、鼻血が出て、白血病や原爆症により  
ほとんどの人が亡くなっ、てしまった。この原  
爆で亡くなっ、た人の数は十四万人といわれ  
ている。原子爆弾は、ものすごく残酷で非情な  
物だと実感した。  
8月6日私は、「広島市原爆死没者慰霊式  
並びに平和祈念式」に参加した。参列者は5  
万人もいて海外からも多くの国々の代表者が  
参列していた。黙とうの鐘の音が耳の奥に響  
いた。私はその鐘の音を聴きながら被爆体験  
伝承者の方の話や平和記念資料館で見た写真  
の数々を思い出した。

「平和大使として学んだこと」

「平和大使」として私にできること

西初石 小学校 5年 氏名 小林 珠季



「平和大使」を終えた今、私が強く思うのは核兵器を絶対に使ってはいけないということだ。「戦争」という意味のないことが起こらないよう今ある平和を永遠に守っていきたい。そして平和大使として広島へ行っただけで学んだことを多くの人に語り継いでいきたい。

# 「平和大使として学んだこと」

大事な一瞬が平和のために



鯨ヶ崎 小学校 6 年 氏名 小林 可奈

私は、平和大使として来て広島である。たこ  
を、見て聞いて感じてきました。  
平和記念資料館では、たくさんの方の骸骨、全  
身に火傷を負った人、などの写真や絵があり  
衝撃的でした。体験談では、「死にたいとは思  
わなかった」という言葉が心に残りました。  
私だっただけにたいと思。てしま。う。だ。が  
らです。被爆死した人よりも被爆体験で生き  
ている人のほうが苦しいんだな、と思いまし  
た。  
日本は平和で安全。広島に行く前は、そう  
心で思。ていました。しかし、広島に行き  
戦争という恐しさを感じました。そして、原  
爆は、被害をうけた人々以外にも放射能によ  
こ、亡くな。ていくのです。戦争や原爆、そ  
れは口にはできないほどの恐ろしいものです。  
被爆死した人はき。と、戦争のない世界を  
願。ていると思います。まだ未来がある赤  
んなどの命を奪。て、一人の人間を人間じ  
なくすようなことをした原爆です。た。た

一つの原爆で、多くの人が命を落しました。  
戦争で原爆をそれだけの国で使うと、広島  
や長崎で亡くなった人数に比較にならないほ  
ど多くの人が影響をうけ、この世界の終りに  
な。てしま。う。かもしれません。これ以上、世  
界に被爆地、「ヒロシマ」のようなことを増や  
さないためにも原爆をなくし、平和を願いま  
す。  
「平和大使」を経験し、戦争はしてはいけ  
ないこの思いが強くなりました。そして広島  
のことをわかしよりもよく分。た。気がします。  
みんなが分り合えば平和になると思いまし  
た。話しても分らなければ、戦争をして、殺  
し合いになります。だから、分り合うこと  
が大切だと思いました。  
私はその一歩として、他人を知る、事から  
始めていききたいと思います。

「平和大使として学んだこと」

広島へ行き思ったこと



魚ヶ山奇 小学校 5年 氏名篠井 瞭太郎

ぼくは、広島へ行き原爆の事実を知りました。昭和二十年八月六日、広島に原爆が落とされ、多くの命が犠牲になりました。被爆者の方の話では、わけをおいて倒れている人が水を欲しがっているのにあげたら死んでしまうということを知り、切ないと思いました。

原爆ドームは、爆心地から百六十メートルしかはなれていないのに、形が残っています。ごいと思いましたが、資料館で原爆が投下される前の写真を見て、やはり原爆の力は強いと思いました。もともと白く、今より奥行きがあつたけれど、今は茶色くなり一部分が残っていないからです。

資料館では絵がいっぱいかざられています。特に目に入るのは、子どもが左手で落ちてきた自分の目をとった絵です。他にも、自転車ががざられていて、タイヤが曲がり、ハンドルの向きが変になってほね組みがすごく細くなっていたのも、すごい力がかかっていた

ことを実感出来ました。式典は初めてでもきんちゅうしました。平和のかけを実際に聞くのは初めてです。ごく心にひびきました。

広島へ行き、自分が思っていた以上に一発の原爆の破壊力のすごさを知りました。そして改めて使ってはいけないと思いました。そのためは、皆一せいに手放せはよいと思いません。そうするには、核を捨てないとは、ルールを作れば手放せると思いますが、そしてルールを作るには皆が核はいけないと思わないといけません。そのため出来るだけ多くのの人に広島で知った、核の悲しさや伝えます。その第一歩としてぼくは、流山市長に伝えます。そうすれば多くの流山市民に伝えるのもう一つも出来、今回の平和大使のよう活動が広がっていくのではと思います。

また今回の活動は感じたことを学校で発表するなど、自らの言葉でも伝えていきつつ、今後も知る努力をしていきたいです。

# 「平和大使として学んだこと」

平和の大切さ



小山小学校 6年 氏名 里村 藍

私は、平和大使として広島へ行き、まず一番に、戦争や核兵器はすごく怖いものだと感じました。一瞬に起こった一発の核兵器で、多くの人が亡くなってしまうのは、とても怖い事で、二度と起こってはいけない事だと感じました。

平和大使になるまでは、正直なところ、平和や戦争などについて、あまり深く考える機会はありませんでした。しかし、平和記念公園や平和記念資料館を訪れ、また被爆者の方のお話を聞いて、平和なのが当たり前ではないという事を改めて感じ、しっかりと考える必要がある事を学びました。

平和記念資料館での、あの雰囲気。そこでは誰もが真剣な表情で、ふさける人などいませんでした。戦争や核兵器の絵や写真などたくさん展示物がありました。それらはすべて、見るのがつらいものばかりで、目をそむけたくなるほどの怖さを感じました。戦争を実際に体験して、その事を思い出して話すの

は、とてもつらい事だろうと思いました。それでも戦争の事を話して下さる被爆者の方から、話を聞くと、現在の私達も、その怖さを知って、しっかりと考え、家族や友達などに伝える事が必要だと考えました。

大使としての経験を通して、私は、戦争や核兵器の使用は二度とあってはならないものだと思います。また、平和なのが当たり前の事と思わず、平和の大切さとありがたみを感じ、しっかりと学びました。そして自分にできる事は何か、と考えました。まず一つ目に私は、戦争の怖さを忘れないために毎年テレビなどで平和記念式典を見たいと思います。二つ目に、インターネットなどで世界で今、何が起きているのか、とれくらいのか、どのよう困っているのかなどを調べたいと思います。そして、自分にどのような事ができるかを考え、募金など、簡単な事から実行していきたいと思えます。

「平和大使として学んだこと」

78年前に、広島に原爆が落ちたこと

江戸川台小学校 6年 氏名 鈴木 亨 亮



ぼくは、流山市代表の平和大使として広島に行き、貴重な体験をしました。

被爆伝承者のお話では、被爆伝承者のパウラムジュ士人は、一九四五年八月六日に広島に原爆が落ちて街が焼かれ、やけどをした人に水を飲ませたら死んでしまったり、水という言葉だけを言って死んでしまった人、黒色の雨があらぬのように降ったこと、天皇陛下は人さしと言っていて亡くなった人のことを話してくれました。僕はとても悲しくなりました。

た。また、太平洋戦争は正義の戦争とも言っていて、僕は、戦争が正しいという考え方は理解出来ません。そして、現在ロシアがウクライナと戦争している事は、昔、日本とアメリカが戦争していた歴史を繰り返していると思います。

平和記念資料館で一番印象に残ったことは原爆で焼かれてぼろぼろになった三人の中学生の男の子達の服です。男の子達は全員原爆で亡くなりました。これを見てぼくは、二度

と戦争が起きてほしくないし、原爆をもう使ってほしくないと思いました。

平和記念式典では、原爆が広島に落とされた八時十五分に黙とうをしました。広島に一発の原爆が落とされて、一瞬で十数万人の人が亡くなったことを考えながら黙とうをしました。原子爆弾によって広島は破壊された。また、今の広島は美しい緑の街になっていて、良かったと思えました。

式典終了後、広島G7サミットの展示物を見ました。G7サミットが今年五月に行われたため、今回の式典には過去最多となる世界百十一か国や国際機関の代表者が参列しました。一方、ロシアは核兵器による威嚇を重ね中国や北朝鮮は核兵器の増強を進めています。今回、僕が学んだことは、世界が少しでも平和になってほしいこと、戦争がこれ以上繰り返してほしくないこと、二度と核兵器を使ってはいけないうことです。この強い思いを周りの人に伝えていこうと思います。

「平和大使として学んだこと」

# 戦争のつらさ



小山 小学校 5年 氏名 鈴木悠慎

昭和二十年（一九四五年）八月六日午前八時十五分、広島に原子はくたんが投下されました。そのとたん、平和だった町は一瞬間にして、焼きつくされ、人々は皮ふがたれさかり血まみれになり、せつぼうのさげびをあげました。

そんなことがあったと記されている平和記念資料館に行き、様々な資料を見学しました。何も準備ができていたまま、原はくが落とされ、太陽がもう一つできたような高温で人々は焼かれ、体にはとてつもないけきつうがはしり、その時のいたみ、悲しみ、苦しみなどが、心や体にじわじわと伝わりてきました。印象に残った資料が二つあります。一つ目は、黒い雨（放射線の雨）で油のようになるぬるとして、（のえいきょうで、放射線が血をばき、いさなり死んでしまった弟を描いた絵です。ほくにも弟がいますが、もし弟に同じことが起こったりと想像すると、いてもたってもいられない気持ちになります。もう一

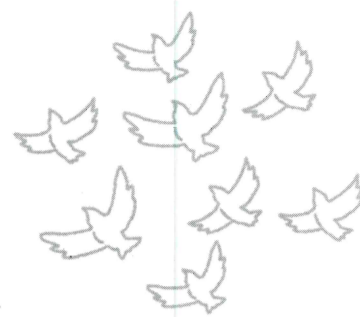
つは、原はくのえいきょうで焼かれ、死んでしまっただんたちが実際に着ていた服です。血まみれになった服を見て、七八年前のいたみが体全身を駆けめぐりました。

さらに、原はくによって、いたみ、苦しき、悲しみを実際に体験したてはく者の方、原はくによつて死んでしまっただんの方、原はく話を聞くことができました。その時のじょうきょうをよりくわしく、リアルに知ることができました。深くきずついたら人は、広島に原はくを落とした米国にとつてもないいかりがあつたでしょう。ほくも話を聞いただけなのに米国にいかりを感じました。

たくさんの人たちのいかり、原はくをうけたときのせつぼうのさげびを学び知ることでもう二度とこんなことが起きないように、させなければぬい、ほくたちが後世に伝へていかなければなりません。それがほくたちが「平和大使」としての役目なのだと、広島に行つて実感しました。

「平和大使として学んだこと」

広島から平和について学ぶ



流山 小学校 6年 氏名辻 勇輝

広島に着き、空を見上げると澄んだ青空でした。とても暑く、すぐに汗が出ました。高い建物、たくさんのお店、人が大勢いて、とてもにぎやかでした。そして、外国の方が多かったことに驚きました。今年は広島サミットがあったので、訪れる人が多いとテレビのニュースで聞いたのを思い出しました。この街に原爆が落とされたとは、想像できませんでした。

広島に行く前に、戦争の事、広島のことについて本を読んだり、テレビの特集番組を見ました。でも実際に、被爆体験伝承者の方のお話を聞いた時、今までにない衝撃を受けました。その中で、  
「今、日本は平和。それは、悲しみの上に築いたもの。」  
という言葉が、一番心に残りました。つらくて、悲しい体験を戦争を知らない僕達に、下を向く事なく、顔を真っすぐ上げて語ってくださった事、ずっと忘れません。

流山の市民のみなさんの平和を願って折られた千羽鶴とぼくが折った鶴も一緒に、平和記念公園に献納させて頂きました。  
原爆ドームを目の前で見ました。鉄骨のみになったドームの部分、レンガが丸見えになった壁、本当に原爆が落とされた場所にいると実感しました。ぼくは空洞のドームからみえる青い空を見て、世の中は変わっても、原爆の恐ろしさは、ずっと伝えていかなければいけないと思いました。

平和記念資料館では、たくさんのお被爆した方々の遺品がありました。僕達と同じ年齢くらいのおたくさんの子供が、犠牲になっていてとても悲しくなりました。戦争が終わった今でも、原爆は多くの人を苦しめています。  
平和記念式典に参加させて頂き、平和の大切さについて改めて深く考えさせられました。被爆者の方の思い、自分の目で見て感じた事を伝えていきたいです。



# 「平和大使として学んだこと」

## 被ばく者の思い



おおぐろの森 小学校 6年 氏名 又松 宗功

資料館の展示でぼくに最もうったえたことそれは、ぼくと同じ年の女の子の最後の言葉だ。「お水をちよらうだい」これは、自分では水がとれないほどつらかったということだろうか。今、ぼくが使う「お水をちよらうだい」とは全然意味のちがう悲しい言葉だ。この子はその望みをかなえることができたのだろうか。たった一つの原子はく弾で多くの人が、このような思いをしなからたくな。ていつたのだと思うと、とても怖かった。

また、被ばく者講話で心に残ったのは「被ばく者は、ころんだ時に一回めは起きあがるけれども二回ころんではしま。たら、かつまで二度と起きあがれなかつた」という話だ。みんな「生きたい！」と思って起きあがったはあだ。それなのに体力が残っていなく、かつきた人が多くいたのだらう。

他にも「被ばくした人は、ひふが垂れさがったり、かみの毛がぬけていった」とも書いた。多くの人が七くなり、たとえ生き残った

としても、多くの後い症が残り、その後多くの苦勞があつた。ぼくの日常とは、全然ちがう。

今回、平和大使として広島に行くことができた。資料館、被ばく者講話、そして平和記念式典へ参列したことで、「昔に日本でおこつたこと」という過去のことではなく、今も続いている出来事であることだと実感した。戦争が終わってから七十年以上たっているのに、まだ苦しんでいる人が大勢いる。そしてそれを伝えようとしてくれる人も大勢いる。戦争がはじまりその後終わっても、その後には長い時間、苦しむ人が大勢いるのだ。このようなことを戦争を知らない人たちに広めていき、平和を保つことの大切さを伝えたい。

平和のバトン

東

小学校

5年

氏名

福田万桜



被爆体験者のお話で一番心に残ったのは、  
原爆が落とされたときのお話でした。

そのお話はあまりにも残酷でした。街中が  
燃えていて黒みがかった朱色の煙におおわれ  
、焼けただれたひふがぼろぼろの服とくっつ  
いていたり、血まみれになった全身がはれあ  
がり男が女がわからぬ状態だったとい  
ます。衣服が引きさげ、ひふがたれ下がり、  
ゆうれいのような姿の人たちが両手を前にぶ  
ら下げて歩いていく絵を見ました。被爆者の

方たちのたくさんさんの絵は、明るい色も使われ  
ていたのかもしれないですがほとんどは暗い  
、黒っぽい色ばかりで、そのときの悲しさ  
が今でも強く伝わってきます。原爆によつて  
最愛の家族の死や生きる気力をうばわれ、食  
料もなく、その後の生活は大変な苦労があっ  
たそうです。75年は草木も生えないと言わ  
れるほど破がいしつくされた広島は原爆ド  
ムが残されていなければ、その悲しさを感じ  
させることのない大きな街でした。

平和記念式典では、小学6年生の二人が「平  
和への誓い」を宣言していました。同じ小学  
生なのに、あんなにたくさんの人達の前で堂  
々としていてすごいな、と感じました。  
っひいおじいちゃんが死んでいたらお母さん  
も生まれていなかった。  
「生き残ってくれてありがとう。」  
あの日から大変な思いをして私達につないで  
くれた命のバトンが二人から見えた気がしま  
した。

たくさんさんの命がつないでくれた「平和」の  
ために私ができることは何だろう。この体験  
をみんなに伝えていく。まだどう伝えればい  
いかわからないけど、私の手の中にある平  
和のバトンをそうやってつなげていきたいで  
す。

「平和大使として学んだこと」

平和のためにぼくたちができること



小山

小学校 五年 氏名 船田 和彦

戦争している国があるのはテレビで見たり  
 何かあつたので戦争してこるうだなと思つ  
 ていました。だからあまり身近に感じていませんで  
 した。志島平和記念資料館の見学をして一番  
 印象に残っているのは、七十八年終つた今で  
 もその当時原爆くをうけた人の襟口ボロにな  
 った洋服やベルトなどかそのままで展示され  
 ていたことです。展示されている写真には、  
 やけどでたれさかた皮ふの人やかみの毛が  
 ぼさぼさになつていている人、原爆くドームのま  
 たり一面はすべて焼けて向もなくたつている  
 ようすが写つていました。戦争や原爆くはこ  
 ろいなと思ひました。原爆くが落ちたところ  
 からころろキ口先までひまわり原爆くのひ  
 かはすびいなと思ひました。原爆くをうけて  
 血だらけになりなかつたおれはおきあがり  
 たおれはおきあがり、水を求めて川に向か  
 ったおれは水を飲ぶことかできおになつた。  
 左んかおおせいいと聞き、いと鬼のをし  
 なかつた水も飲めなかつた左んかおおせいいと

とておかわいそうだなと思ひました。戦争は  
 とてもおわいこと。原爆くはい、しんです  
 べしをうばうとてもおわいものだとしてよ  
 くかんじました。だから戦争も原爆くもやめ  
 た方がいいと思ひます。平和記念式で小学生  
 代表の人が「平和とは争いや戦争がなく、差  
 別やちかひを認め合ひ鬼口を言つたり、けん  
 かをしたりせず、みんなが笑顔になれること  
 と言つていました。ぼくたちがやるべきこと  
 は、ひとりのとりか小さな平和を守れば世界  
 の平和につながると思ひます。七十八年前に  
 起きたひげきをくりかえさない、あすもない  
 として伝え続けることか大切だとして平和大使  
 として志島へ行つて強く思ひました。